

仮設建設が急務

AMDA 隊員帰国報告

多数の死傷者を出したトルコ大地震で、被災者の救援に当たっていたアジア医師連絡協議会（AMDA）のメンバーが帰国、十二日、岡山市榴津のAMDA本部で記者会見した。派遣された医師らは現地での医療活動などを報告、「今後は精神的なケアや仮設住宅などの建設が必要となるだろう」と訴えた。

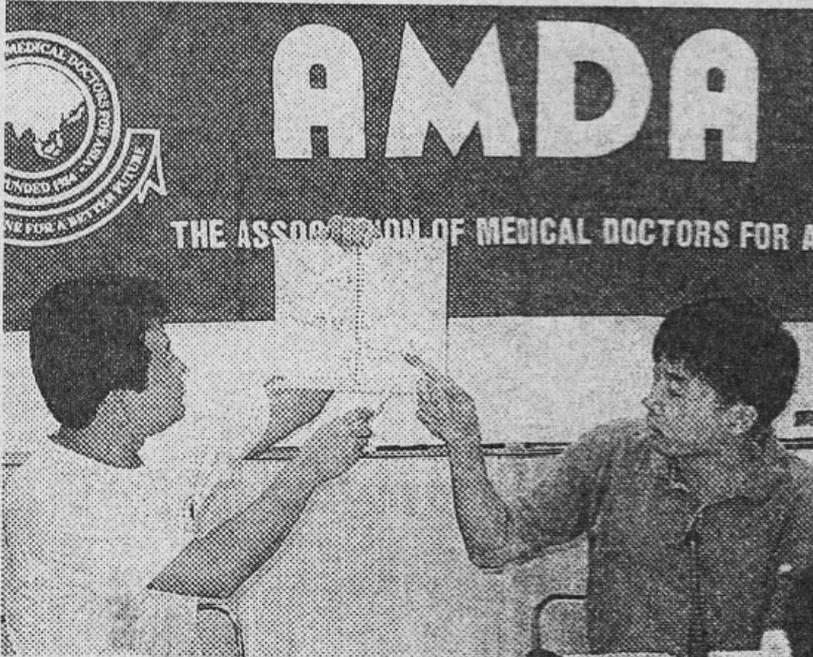
・AMDA国際協力調整員（32）（広島県廿日市市地御前）と上田明彦医師（32）（東京都調布市）ら三人。

イエ村などで主に風邪などの治療に従事、八月三十一日に帰国した。

大塚調整員と上田医師は八月二十一日夜、最も激しい被害を受けたイズミトの南西十数キロのヌシエティエ村に入った。大塚調整員はイスタンブールなどにも行き、救援活動に必要な情報を収集し、今月十一日帰国した。上田医師はヌシエティエ村などで主に風邪などの治療に従事、八月三十一日に帰国した。

上田医師は「被災者は親せきの家などを求めてヌシエティエ村など周辺の人に逃げ出していた。恐怖感から自宅に戻れず、テント生活を送るなか、降雨などで風邪をひいたり不眠症で悩んだりする患者が増えている」と報告した。

大塚調整員は「阪神大震災の時と同様、PTSD（心的外傷後ストレス障害）の発症などが予想され、精神的な支えが必要。冬季に備えての仮設住宅の建設も要する」と訴えた。



トルコでの活動を報告する上田医師（右）と大塚調整員